

コミュニケーション能力の育成をめざす 「長良メソッド」の実践とその効果の検証

—新しい学習指導要領を具現化する一指導法—

岐阜県立長良高等学校 教諭 石神 政幸

概要

平成21年3月に出された「高等学校学習指導要領」では、「4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行う」ことや、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」ことがうたわれた。本稿ではこの新しい学習指導要領を具現化していく一指導法として、岐阜県立長良高等学校で行われている「長良メソッド」について報告する。「長良メソッド」では、シャドーイングやサイト・トランスレーションなど音読を中心としたインプットと生徒がカセットテープレコーダーを利用して会話をするアウトプットの活動が行われている。この「長良メソッド」の指導法を概観し、その実践と効果の検証を行う。

な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成するとともに、その基礎となる文法をコミュニケーションを支えるものとしてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行う」ことや、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」ことがうたわれた。

この「授業は英語で行うことを基本とする」ことは、「教師が授業を英語で行うとともに、生徒も授業の中でできるだけ多く英語を使用することにより、英語による言語活動を行うことを授業の中心にすることである。これは、生徒が、授業の中で、英語に触れたり英語でコミュニケーションを行ったりする機会を充実するとともに、生徒が、英語を英語のまま理解したり表現したりすることに慣れるような指導の充実を図ること」を目的としている。

また、「英語による言語活動を行うことを授業の中心とするためには、読む活動においては、生徒が、生徒の理解の程度に応じた英語で書かれた文章を多く読み、訳読によらず、概要や要点をとらえるような言語活動をできるだけ多く取り入れていくことが重要である。また、書く活動においては、読んだ英文を英語で要約したり、推敲を繰り返しながら主題に沿って文章を書いたりする言語活動をできるだけ多く取り入れていくことが重要である」とも述べている。

では、この新しい学習指導要領を具現化していく指導方法とはどのようなものがあるのか。次の章では、その具体的な指導方法の一例として「長良メソッド」について考えてみたい。

1 はじめに

平成21年3月に出された「高等学校学習指導要領」および同年12月に出された「高等学校学習指導要領解説 外国語編英語編」（いずれも文部科学省）では、「外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝えたりするコミュニケーション能力を養う」を目標として、『聞くこと』、『話すこと』、『読むこと』および『書くこと』の4技能の総合的

2 「長良メソッド」

2.1 授業改革への道のり

筆者が岐阜県立長良高等学校（以下、長良高校）に赴任した平成15年の11月、岐阜県教育委員会から本校に、文部科学省が推進している「スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール（SELHi：セルハイ）」に応募しないかという知らせがあり、当時の学校長（平野恒彦先生）から筆者にその原案作りのお話をいただいた。平野校長は英語がご専門なので、アドバイスをいただき、その基本的な研究課題を『「英語の基礎力を身につけるための音読指導およびリスニング指導のあり方」—普通の教育環境の、平均的な、どの学校でも実施できる教育実践を考える—』ということにした。英語科の職員は10名で、その中の筆者を含めた4人で企画を担当し、随時英語科会議で話し合いをした。そして、その「SELHi 希望調書」を提出したのだが、残念なことに文部科学省からはよい結果をいただくことができなかった。しかし、本校では私たちがめざす英語教育を実践していこうということになり、平成16年度から英語教育授業改善がスタートした。

私たちのこの英語教育授業改善に対する思いは、「SELHi 希望調書」の研究課題設定理由に述べられているので、次にその一部を引用する。

2.2 SELHi 研究課題設定理由

① 現状

現代は人間の諸活動が複雑多岐にわたり、政治的にも経済的にも、多くのことが世界規模で進展している。それゆえ、この21世紀を生きる日本人にとって、ますますコミュニケーション能力が必要とされつつある。英語が国際的なコミュニケーションの手段としてほぼ定着した現在では、コミュニケーションの手段としての英語習得の重要性はますます高まっている。

もちろん、すべての日本人が外国人と専門分野で自由に議論できるほどの高度な英語力を身につける必要は必ずしもないし、それを求めるのは現実的なことではない。しかし、特別な一部の日本人が英語をコミュニケーションの手段として使うことができれば済む時代は終わり、大半の日本人が将来、さまざまな場面で英語を使用する必要に迫られてくるだ

ろう。それゆえ、すべての日本人にとって、少なくとも「英語を用いる必要が生じたとき、何とか使うことができる力」は必要であり、「さらに専門的で高度な英語を身につける土台となる力」を高校時代に身につけることは不可欠である。

一般的に言語習得のためには若い時代にその言語が話されている環境で過ごすことが一番の早道であることは周知のことである。教室の中でもごく少人数のクラスで現実の場面に似た環境を作り、沢山の時間を費やすことができれば、大きな効果はあがることも実証されている。しかし、現状の日本の普通高校ではそれはなかなか難しい。というより、週にわずか数時間の英語授業の中ではとうてい無理であろう。そのような状態にもかかわらず、我々は中途半端にコミュニケーション活動を取り入れた授業を中心に英語の基礎力もコミュニケーション能力も育てようとしてきた。

本県でも中学校では「コミュニケーション能力を伸ばす指導」の実践が多く行われ、生徒が生き生きと活動する素晴らしい研究成果が沢山報告されている。しかし、高校に入学してくる生徒たちの英語力は、15年前と比べて大きく伸びたとは言い難い。特に文法の力や語彙力は低下していると言える。肝心のコミュニケーション能力すら育っているわけではない。中学校での素晴らしいコミュニケーション活動の授業が全般的な英語力に結びついていないのはなぜか。それはおそらく、その場面でのコミュニケーション活動は巧みにこなせても、また英語学習に対する関心・意欲・態度は高まっても、それを持続させ、基礎力を定着させる反復練習があまり行われていないからではないだろうか。

また一方、英語科や英語コースなどをもたない平均的な普通高校では、新入生の文法力不足や語彙力不足をカバーすることを錦の御旗として、いまだに文法訳読中心の英語指導が行われていることが多い。それどころか、従来の方法を一層強化しようという傾向すらある。確かに、リスニング試験のある大学入試等に向けて、音声指導を行っている学校も多くある。しかし、それは文法訳読中心の指導に加えてプラスα的に行われていることが多い。全国の多くの普通高校では現在でも音声面での指導が重視されていないために、ペーパー試験ではある程度の力を発揮しても、音声での運用に自信のない生徒が大多数を占めている。この現状は本校でも同じであ

る。

本校では、今まで国際交流活動に取り組んできた。海外研修や海外とのTV会議を初め、その他さまざまな形でいろいろな人々と国際交流を行ってきたし、それは確かに一部の生徒の英語学習への動機付けにはなってきた。しかし必ずしも多数の生徒のコミュニケーション能力の向上を意味するものではなかった。まして、全ての生徒の音声面での基礎力向上にはほとんど貢献できなかった。

私たちの現状認識と反省は本校のこれまでの改善の視点が授業の抜本的改善に切り込んでいなかったことであると考えている。国際交流活動にせよ、授業の中でのコミュニケーション活動にせよ、語学学習の土台である基礎・基本の徹底が行われて初めて意義のあるものとなるはずである。興味・関心を引き出すことに主眼がおかれ過ぎて、基礎・基本の定着が十分でなかったのが現状である。

本校がこれまで行ってきた国際交流活動の中で生徒が感じ取った興味や関心を持続させ、確実な英語力に育てることが十分でできなかった原因もそこにある。それでは、英語の基礎・基本を定着させる努力を怠ってきたかというそうではない。本校においても、手を変え品を変え文法や語彙の基本を教え込んできた。その努力は大きなものであるが、現状分析として、二つの問題点を考えている。一つは音声を通じて基礎・基本を定着させるという姿勢が弱かったこと、もう一つは高校初期段階において、教科書以外の教材を与えずに、教科書そのものの定着に時間を注ぎ込めていないことである。

以上のように我々は本校の、そして、日本の一般的な高校での英語教育の現状は基礎・基本の定着が行われにくい現状にあると考えている。

② 課題

このような現状を打破するためにはどうすべきか。要は授業改善とそれをやる教師の意識改革であるとする。今、我々にとって必要なことは、形式的な授業内容の取り繕いではなく、音声を重視した抜本的な授業改善である。本校の英語教員はみな、この授業改善に本腰を入れて取り組まなければならないという強い思いをもっている。従来の文法訳読中心の授業ではなく、思い切って考え方を变えて、すべての英語授業の土台をリスニングや音読などの音声指導におくことはできないものだろうか。

また、高校初期の段階で英語の基礎力を確実に身につけるためには反復練習が不可欠である。では、何をどう反復するか。教科書を中心にして、音読とリスニングで英文そのものを反復練習する。初歩の段階で、いわゆる文法副読本の授業や市販の単語帳による単語熟語の小テストはやめ、その代わり、教科書の英語を徹底反復させる手だてを考える。授業そのものは勿論、予習でも復習でも、個々の生徒が正しい音声を何度も聞き、何度も声に出して読む、という状況を作り出していくことが肝要である。

しかし音読と言っても、できるだけネイティブに近い音声をまねることと、感情や意向を表現しようとするなどなどを盛り込んで読ませるにはどうすればよいのか。読み方で内容表現したり、何度も繰り返して口に出す、そういう学習の仕方を高校初期の段階に身につけさせるにはどうすればよいのか。このことが大きな課題である。特に予習、復習において、音読やリスニングは形として残らないので、生徒の予習や復習を確実に行わせる手だてが大きな鍵となる。

我々が注意すべきことは授業の中でコミュニケーション活動をよく取り入れるのではなく、基礎・基本の徹底を図ることに力を注ぐことである。基礎・基本の定着と応用力の醸成は切っても切れない関係にあることは当然であるし、言語である以上、一つの表現は現実を使用して初めて自分のものになる、ということも間違いのないことである。しかし、あえて基礎・基本（特に音声の）にこだわるのが、長い目で見れば、結局は応用力に発展するものであると信じる。

できるだけ多くの教材を与えることで、学力をつけさせようとする考え方がある。確かに多読することや、多くの問題にあたることも必要ではあるが、初歩の段階では、教科書の英文の暗唱や教科書の単語、熟語表現の定着にしばらくして、英語に対する自信を生徒の気持ちに植えつけることが大切なのではないだろうか。このようにして音声を重視して教科書の学習を徹底すれば、語彙力も文法力も身につくのではないか。

③（研究開発による今後の）展望

多くの高校英語教師は自らの高校時代に文法訳読中心の授業を受けた。そしてその後、学校の授業とは別の場で英語運用力を何とか身につけたのではな

いだろうか。あるいは自らの英語運用力を高めようと必死になっているのではないだろうか。今の教え方で、生徒に英語運用力がつくとは思っていないが、かといって、大学入試のことを考えると、今の教え方を思い切って変えてしまうには不安がある。これが多くの高校英語教師の偽らざる本音であろう。

本校も地域の進学校として、大学入試で結果を出さなければとの思いから、従来の文法訳読中心の授業から抜け出せず、なかなか根本的な授業改善に取り組めないでいた。しかし、①でみた現状などから、今、我々英語教員はこの授業改善の必要性を強く感じている。この授業改善は実用的な英語運用能力の養成をめざすと同時に、大学入試にも対応できる土台を育成するものでなければならない。

本校で行う研究開発で、「徹底した音読とリスニング指導が定着すれば、音声面のみだけではなく、英語の総合的な基礎力が身につく」ことが検証できれば、英語に特化していない、全国の多くの普通高校で、授業改善に踏み切れないでいる英語教員に、変革への自信と希望を与えることができると信じる。

2.3 授業実践の概要

上項のような「研究課題設定理由」から、本校では、

「音声を通じて基礎・基本を定着させよう！」

「教科書そのものの定着に時間をかけよう！」

という旗印の下、1年生の授業では音読・リスニング指導に重点を置き、意味理解はスラッシュ（フレーズ）リーディングを利用して、英文を前から流れるままに順番に理解するようにし、その後シャドーイングやサイト・トランスレーションなどさまざまな方法で音読を行っている。「オーラル・コミュニケーションⅠ」の授業では、中学校レベルの独自テキストを利用し、「夏休みまでに1000回音読」を目標に家庭での音読に取り組んでいる。11月にはレシテーションコンテストを行い、有名なスピーチや詩、物語などを感情を込めて暗誦する活動をしている。2年生では、音読指導を継承しながら、1年生で培ったリスニング力をもとに多読や速読などリーディング力の向上に力を注いでいる。「ライティング」の授業では、毎時間エッセイを書きながら、最終的には11月に行われるスピーチコンテストの原稿作成へとつながる作業を行っている。また文法に関して

は、文法書を主体とした授業は行わず、教科書の中で文法説明を行い、ALTとの授業においてアウトプットを意識した文法項目の練習を行っている。単語においても市販の単語帳を買うことなく、教科書に出てきた単語を、その文章の中で覚えるようにしている。

このような一連の指導法を私たちは「長良メソッド」と呼んでいる。次にその「長良メソッド」の具体的な指導方法を見てみる。

2.4 「長良メソッド」の具体的な指導方法

▶ 写真1：音読の様子



2.4.1 英語Ⅰ（1年生 週3時間）

英語Ⅰでは1年間1つの教科書を使い、1つのPartを2時間かけて行う。

英語Ⅰでは「シャドーイング」、「リプロダクション」、「サイト・トランスレーション」などの方法を使って、1時間の授業の中で1つのPartを8～10回読ませている。「シャドーイング」では、内容を理解しながら、あるいは頭の中に本文のイメージ（情景）を思い浮かべながらなど活動の目標を明確にするようにしている。「リプロダクション」は、ペアで行い、1人が「スラッシュリーディング」のプリントを見ながら、フレーズごとに読んでいき、もう1人がプリントを見ないで、相手の音声だけをヒントに、もう一度自分で再構築して言うというものである。最初はオウム返しに近いのだが、慣れるに従ってフレーズを長くしていく。「サイト・トランスレーション」では、同じくペアで行い、一方がフレーズごとに日本語を読み、もう一方が何も見ずにそれを英語にしていこうという活動である。この活動ではどうしても日本語を介在させざるを得

ないが、2年生になると、1人が文の出だしの語句だけを言って、もう1人がそれに続けて文を言っていくという活動になっていき、できるだけ日本語を切り離すようにしている。

宿題では、生徒全員に教科書のCDを買わせてあるので、その日の授業で行ったPartを聴きながら、その本文を2回ノートに写すという活動になる。

2時間目では、文法説明と音読が中心となる。そのPartで大切な表現や重要な文法事項を簡単に説明する。

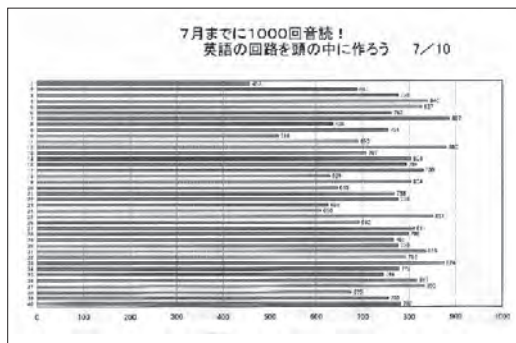
2.4.2 オーラル・コミュニケーション I (1年生 週3時間)

OCIでは、前期は独自教材『基礎英語』（平成18年までは中学校の教科書）を、後期はCD付き長文読解テキストと独自教材『基本英文法』を用いている。週3時間中2時間は基礎の確認と高校レベルの文法事項を学ぶ時間（インプット）、もう1時間はALTの先生との授業で、1時間目に習った文法事項を実際に試してみる時間（アウトプット）になる（後期は、ディスカッションやディベートなど話す活動が中心となる）。

● 週3時間中の1, 2時間目（インプットの授業）

前期では、独自教材『基礎英語』を用いて、音読を中心としながら、中学校レベルの基礎力を徹底して固めることを意図している。宿題として、「夏休みまでに1000回音読」をめざし、家庭で何度も教科書を声に出して読んでいる。作者や主人公の気持ちになって「なりきり音読」を行う。動機づけの一環として、音読の回数を教室に掲示している。

▶ 図1：1000回音読表



後期にはCD付きの長文のテキストを用いて、本文の内容に関する高校レベルの文法事項を教えていく。本文の音読も続けていく。後期では家庭での音読に加え、英語Iと同様に本文をCDを聴きながら2回写すことも行っていく。

● 週3時間中の3時間目（アウトプットの授業）

ALTとのティーム・ティーチングを行う。前期では、1時間目に学んだ文法事項を、タスク活動を通してアウトプットする。あるテーマについてペアで会話をし、カセットテープに録音してディクテートを行う。後期では、あるテーマに対し、賛成反対の意見をグループでブレイン・ストーミングした後、ペアでディスカッションをし、それをカセットテープに録って、最後にディスカッションの内容のディクテートを行う。前期も後期もALTが生徒の作品を添削し、生徒は誤りを正して清書をし、再度提出する。

2.4.3 英語II（2年生 週4時間）

▶ 写真2：図書館に置いてある多読用テキスト



授業内容は英語Iとほぼ同じである。CDを聴きながらの本文3回写しも行っていく。

授業の始めに5分間の多読を行う。オックスフォードの“The Piano”を全員で読んだ後、図書館に設置したペンギンやケンブリッジなどの多読用テキストを各自借りてきて自分のペースで読む。辞書を使わずに、英文を前から理解していく。10月（後期）からは市販の5分間速読プリントを毎回使用。最初は、音声だけを聞いて問題を解き、その後本文を読んでもう一度問題を解く。

2.4.4 ライティング(2年生 週2時間)

1時間はライティングの教科書を用いて、基本的な文法事項を確認する。

もう1時間は1年生でのオーラル・コミュニケーションの授業を発展させた形式で、毎回さまざまなテーマについてグループ、ペアでブレイン・ストーミングを行いながら、各自英作文を書いていく。6月ぐらいから自分でテーマを決め、スピーチの原稿を書き、推敲を重ねながら、11月の総合学習の時間に行われるスピーチコンテストで発表する。

▶写真3：スピーチコンテストの様子

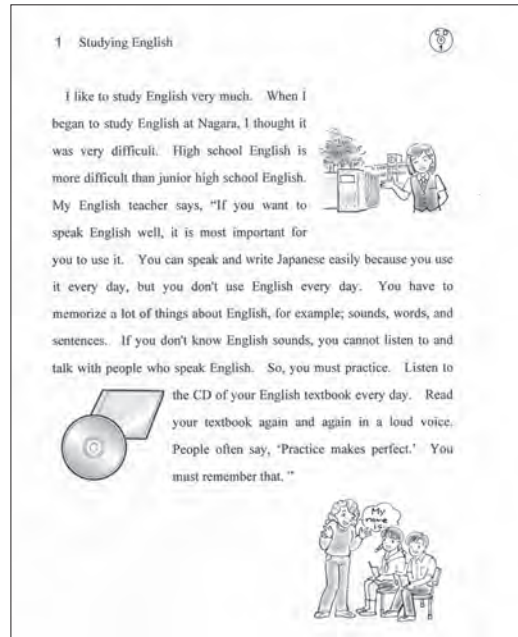


2.5 独自教材の開発

2.5.1 『基礎英語』

高校での導入時において、ブリッジ教材として使用するのに最もよい教材は、中学校の教科書であるの言うまでもない。中学校の教科書は音読・暗唱するのに適切であり、その音読・暗唱が徹底できれば、英語運用能力向上において高い効果が得られる。本校でも平成16年から18年までの3年間、中高ブリッジ教材として東京書籍の“NEW HORIZON”を使用してきた。しかし、問題点として、生徒が使用していた教科書は地区によって異なり、付属の音声教材も高価なものが多く、買い直すには保護者の経済的負担も大きいことが挙げられる。また、自校のALTに読んでもらい、CDを作成して生徒分を複製するのが安い方法なのだが、その場合著作権の問題が発生する。そこで、本校では平成19年度用に中学校レベルの副教材とその音声CDを開発し、副教材はオーラル・コミュニケーションⅠの授業の中で使用し、CDは家庭での音読練習用として生徒に配布することにした。

▶図2：『基礎英語』のテキスト



2.5.2 音声 CD

『基礎英語』の音声CDを作成し、生徒一人一人に配布してある。英文の音声は本校のALTおよびGuest teacherに録音してもらった。このCDを利用して、生徒は1000回音読に取り組んでいる。また、チャンクごとの日本語も本校の教員が録音し、生徒はその音声を聞きながら、すべて英語に直していく活動ができるようになっている。このCDには、他に新入生課題の音声(中学で学ぶ単語や基本例文)や、レシーションコンテスト用の音声が含まれている。

2.5.3 『基本英文法』

『ALL-ROUND Level A』(美誠社)に準拠した独自教材である。『ALL-ROUND』の英文から重要な文法事項を取り出し、解説している。高校での基本的な文法事項はほとんどすべて網羅されている。

授業改善を行う前年(平成15年)、教員4人からなるチームを作り、中学の教科書や高校の教科書の文法事項をリストにし、高校1年前期、後期、2年の3段階に教える文法事項を分け、それに基づいて『基本英文法』は作成されている。当初プリントとして毎回配布されていたのだが、卒業生から「このプリントはとてもわかりやすかったので、2年生や3年生でも繰り返し見ていた」という感想を聞き、平成20年度から『基本英文法』として冊子にし、

2, 3 年生でも勉強しやすいように文法項目ごとの INDEX も付け加えた。

▶ 図 3: 『基本英文法』のテキスト



2.5.4 『Words & Phrases』

▶ 図 4: 『Words & Phrases』のテキスト



『PRO-VISION ENGLISH COURSE I, II』(英語 I, II の教科書) および『ALL-ROUND Level A』(オーラル・コミュニケーション I のテキスト) に出てきた単語の意味や派生語などを整理するための独自教材。本校では 2 年生の冬まで市販の単語帳を買わせてはいない。単語一つ一つを単独で暗記させるのではなく、本文の中で出てきた単語を、その文章の中で覚えさせるようにしている。

3 新しい学習指導要領を具現化する一指導法

3.1 「長良メソッド」と文法訳読式

第 2 章では、「長良メソッド」の指導方法を簡潔に述べてきた。「長良メソッド」において、生徒たちは 1 回の授業の中で何度も音読をしている。さらに本文の内容を Q&A で確認したり、英語で要約したり、リプロダクションを行ったり、本文に関する自分の意見をペアで話し合ったり、書いたりしている。このことは、「高等学校学習指導要領」にある「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」、「生徒も授業の中でできるだけ多く英語を使用することにより、英語による言語活動を行うことを授業の中心にする」という考えを具体化する 1 つの方法を示している。1 時間の授業でほとんど日本語だけを話していた、従来の訳読中心の授業形態と比べると、生徒が英語に触れる割合は大幅に増えた。

また、「文法をコミュニケーションを支えるもの」としてとらえ、文法指導を言語活動と一体的に行う」という点においても、「長良メソッド」では従来のような文法の補助教材を解説し問題を解くといった文法中心の授業は行っておらず、教科書やテキストの中で出てきた文法事項をスパイラル式に学ぶという形態をとっている。これは新しい学習指導要領が意図することであろう。しかし、「長良メソッド」において文法の効果的な教え方はまだ十分に確立できておらず、特に「高等学校学習指導要領解説」にあるように、「文構造」を中心としつつ、英語を英語のまま前から順番に理解していける文法の指導方法を今後考案していく必要がある。

3.2 「4技能の統合」の具体的な教え方

次に新しい学習指導要領の「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」および「書くこと」の4技能の総合的な指導を通して、これらの4技能を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成する」ことを具体化する指導方法をオーラル・コミュニケーションのチーム・ティーチング（以下TT）の授業を例に見てみたい。

後期のTTの授業では、生徒は特別教室に入ると、教室の後ろに置かれたカセットテープを1つずつ取る。そのカセットには番号が書かれていて、その番号が本日の席の番号になる。つまり、コミュニケーションするペアは毎回違う生徒になる。その後、そのテープを各自のカセットデッキに入れ、ディクテーションをする。カセットには“The Adventure of Tom Sawyer”の音声が入っていて、毎回決められたユニットを書き取る（これは「読み聞かせ」のイメージに基づいており、そのため市販のリスニング教材ではなく、連続した物語を選んでいる。また、2年生での多読につなげるねらいもある）。10分程度のディクテーションをした後、本稿末の資料のようなプリントを配布し、ALTが重要な単語を解説する。そして最初の文章（資料では“Robinson Crusoe”）を生徒は黙読する。その後、プリントを裏返して、ALTがその内容の質問をし、生徒がそれに答える。次に、その文章と関連するテーマ（資料では「無人島での生活」）の導入がなされる。ALTが船が難破し、無人島で生活することになる物語を絵を用いて簡単に話す。そして、ペアでそれぞれ1分ずつのsmall talkを行う（本時では、「無人島に誰と一緒にいきたいか。それはなぜか」）。その後、ALTから「無人島に持っていく品物を3つ選ぶ」という課題が出され、生徒はその品物を選んだ理由を「マッピング・プリント」を用いてブレイン・ストーミングし、英語で書いていく（内容によってはグループでブレイン・ストーミングを行うこともある）。次に、ペアで自分が選んだ品物と理由をディスカッションし、カセットデッキレコーダーに録音する（録音する人はペアの一方）。できるだけ、相手を説得し、相手に自分の意見や主張を認めさせるように生徒たちに伝えている。会話の時間はおよそ5分程度である。次にペアを変えて同じように会話し、録音する（録音する人は先ほど録音しなかった人）。そして最後に録音したものを用紙に書き写す

▶写真4：チーム・ティーチングの様子
ALTによる導入



ブレイン・ストーミング



カセットレコーダーを利用したレコーディング



ディクテーション



(基本的に会話のまま書き写すのであるが、文法的に誤りがあれば訂正しても構わない)。そのプリントをALTが添削して、後日返却する。

このような一連の活動をTTの時間で行っている。後半(1月ぐらいから)では、ディスカッションからディベートに移行する。この1時間の活動の中で、4技能をさまざまな方法で繰り返し用いるように仕向けている。

4 「長良メソッド」の効果の検証と課題

4.1 検証と考察

4.1.1 英語コミュニケーション能力判定テスト CASEC

▶写真5: CASEC



CASEC (Computerized Assessment System for English Communication) とは、教育測定研究所(JIEM)が行っている、項目応答理論に基づいた英語能力判定テストで、コンピュータを通して実施される。今回の英検英語研究助成金により、1年生の1クラス(40名:男子(20)、女子(20))を対象に7月と2月に実施した。TOTALのスコアで比較したのが次の表1である。

■表1: CASECの結果

		7月	2月
	<i>n</i>	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)
TOTAL	40	382.0 (49.5)	422.3 (58.1) **

** $p < 0.01$

このTOTALのスコアで t 検定(両側)を行った結果、有意差($p < 0.01$)が認められ、「長良メソッ

ド」の有効性が示された。

4.1.2 英語運用能力テスト ACEの結果

ACE (Assessment of Communicative English) とは英語運用能力評価協会および桐原書店が行っている英語運用能力を測るテストである。年度始めの2009年5月に実施し、同一問題を年度末の2010年2月にも実施した。今回の調査の対象をCASECテストと同じクラス(39名、1名欠席)とし、その正答率の推移を比較した。

■表2: ACEの1年間の推移

		年度初(5月)	年度末(2月)
	<i>n</i>	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)
語彙	39	38.9 (7.2)	43.0 (8.4) **
文法	39	41.6 (9.4)	46.5 (11.1) **
リーディング	39	39.4 (12.8)	48.7 (14.4) **
リスニング	39	48.8 (11.9)	54.6 (14.2) *

** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

t 検定(両側)を行った結果、有意差が認められ、語彙、文法、リーディング、リスニングの個々の領域でも「長良メソッド」の有効性が示された。

同様な調査を3年生(文系5クラス185名)でも行った。彼らが1年生の2007年5月に実施したACEテストと同一の問題を3年生の年度末2010年1月にも実施し、その正答率の推移を比較した。

t 検定(両側)を行った結果、有意差が認められ、長良高校の3年間を通した指導方法は、英語運用能力向上において有効性であることが示された。

■表3: ACEの3年間の推移

		1年生5月	3年生2月
	<i>n</i>	<i>M</i> (<i>SD</i>)	<i>M</i> (<i>SD</i>)
語彙	185	31.0 (9.9)	64.1 (16.4) **
文法	185	39.6 (9.1)	63.1 (14.2) **
リーディング	185	41.9 (12.4)	64.7 (17.3) **
リスニング	185	53.6 (9.9)	71.0 (15.0) **

** $p < 0.01$

4.1.3 英語コミュニケーション能力テスト GTEC BASICの結果

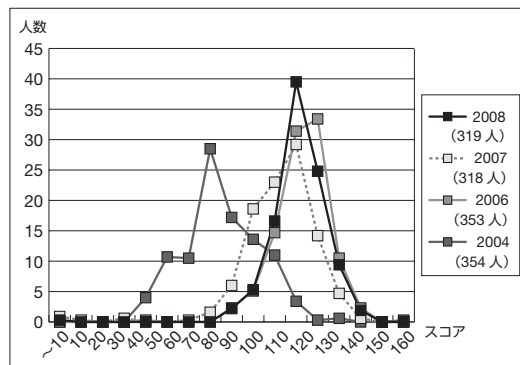
● WRITING の年度比較

GTEC (Global Test of English Communication) とはベネッセコーポレーションが行っている英語コミュニケーション能力を測るテストである。Advanced, Basic, Core の3タイプがあり、長良高校では Basic (高1～高2向け) を毎年2年生の10月に実施している (2005年度 (平成17年度入学生) は実施せず)。「読む」、「聞く」、「書く」の3技能を絶対評価スコアで測定し、技能別英語能力の伸長度を測る。

図5は、X軸が点数、Y軸がそれぞれのスコアの人数の割合である。2004年度は授業改善前すなわち文法を中心とした授業が行われていたときの結果であり、2006、2007、2008年度は授業改善を行い、スピーチコンテストをめざして英作文を書いていく授業を行ったときの結果である。2005年度はGTECを実施していない。

2004年度の結果に比べると、2006年度、2007年度、2008年度ともに Writing の力は大幅に上回っており、その差は歴然である。

▶ 図5：GTEC テストの Writing 年度比較

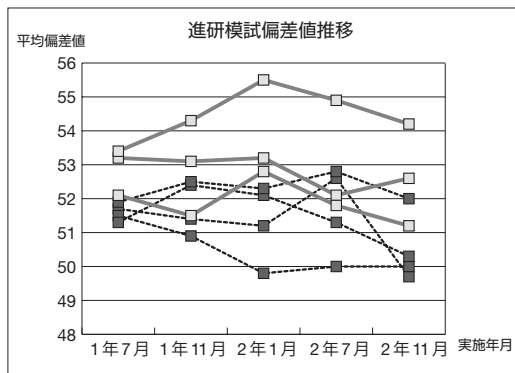


4.1.4 進研模試 (ベネッセコーポレーション) の成績の推移

図6は、英語授業改善を実施した3年間 (平成16年度入学生より) と実施する前の4年間の進研模試 (ベネッセコーポレーション) の平均偏差値の推移である。受験人数は300～350人程度である。太線が英語授業改善実施後、破線が実施前を示している。多少の上下はあるが、おおむね、英語授業改善を行った学年の方が成績はよく、安定しているのがわかる。

音読を中心とした授業が、大学入試などにも対応できていることが実証されている。

▶ 図6：進研模試の成績の推移



上記1～4の結果から、音読を中心とする新しい教授法「長良メソッド」は、十分な成果をもたらし、従来の文法訳読を中心とする授業と比べて、決して劣るものではないということが実証できた。それどころか、GTEC テストの Writing の結果から、ライティングの能力は極めて向上している。また、CASEC や ACE テストの結果から、文法やリスニング力、リーディング力についても「長良メソッド」は有効であることを示すことができた。

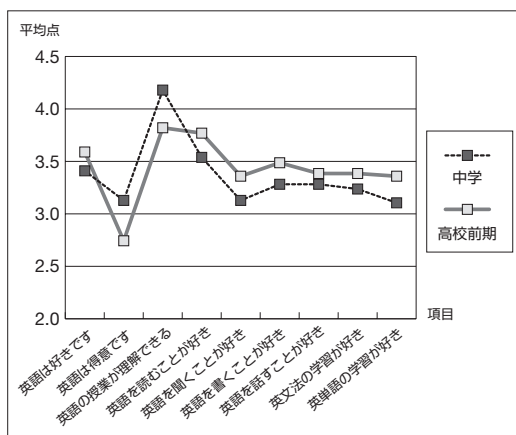
4.2 生徒の意識調査 (アンケートから)

今回の実験を行ったクラス (40名) を対象に、高校1年の前期終了時 (9月) に中学のときと高校1年前期終了時の英語に対する意識を振り返って比較するアンケートを行った。また、学年末時 (3月) に高校入学時と高校1年学年末時の英語に対する意識を振り返って比較するアンケートを行った。英語や英語の授業に対する意識、4技能や英文法、英単語に対する意識を6件法で、その点数の平均で比較した。

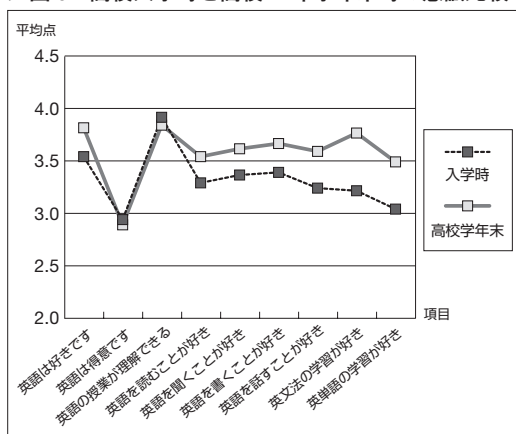
前期終了時のアンケートでは、中学の頃と比べると、授業は難しくなり、得意意識も低くなった。しかし、読む、聞く、書く、話すことや英文法、英単語の学習には肯定的であった (図7)。

高校入学時と学年末時の比較では、読む、聞く、書く、話すことや英文法、英単語の学習に対する肯定的意識は増し、英語が好きだという度合いも高くなっている。(図8)

▶ 図7：中学時と高校前期時の意識比較



▶ 図8：高校入学時と高校1年学年末時の意識比較



4.3 生徒の感想(アンケートから)

次の「長良メソッド」に対する感想は、3年生の学年末時に行ったアンケートの結果である。

- 音読(シャドーイング)について
 - ・音読をすることで中学のときよりも文を前から前から、と内容をつかんで読めるようになった気がします。
 - ・音読することで内容が頭に入って英語Iのリーディングのときに、単語を聞くと英文がすらすらと言えるようになった。
 - ・テストのリスニング問題の聞き取りで、だいたい次の文の予想がつくくらい覚えられるようになった。
 - ・シャドーイングをすると、リズムや発音が同時に身について、より頭の中に入ってきた。
 - ・1000回音読するのは大変だった。

- スラッシュリーディングについて
 - ・スラッシュが入っているから、スラッシュごとに意味はとりやすく、文を理解することができた。
 - ・発音の仕方に気をつけて、読めるようになったし、読むスピードも速くなったと思う。
- オーラルコミュニケーションI(ティーム・ティーチング)の授業について
 - ・英文を書いて、それをALTの先生が直してくれたから、前より英文の書き方がちょっとだけだけどわかった。
 - ・あまり英語で会話する機会がなかったので、仲間と1つのテーマに対して一生懸命英文を考えて会話することができた。
 - ・頭の中で文を組み立てるのが速くなってきた気がするのでよかった。
 - ・もっと話せるようになりたいと思った。
- 多読について
 - ・多読が楽しかった。簡単な文章の読み物でも自分である程度内容がわかると面白い。
 - ・多読によって、多くの英文に触れることができたので、長文への苦手意識もかなり減った。
 - ・多読をして、長文などを読むスピードが速くなったと思う。
 - ・多読をすることで、英文をイメージに、絵にすることができるようになった。
 - ・多読では推測して前から読むという読み方がやる以前より身についたと思う。
 - ・多読は本当に感動しました。初めて英語をやってて自信を持ってました。
 - ・あまり効果がなかった。
- 長良高校の英語の授業の感想
 - ・英語に対する苦手意識がだいぶ取り除かれてよかった。楽しく勉強できた。
 - ・あきらめずCDきくとか、毎日英文よむとか先生のアドバイスきいてやってたら力がのびたって実感できた。
 - ・先生たちが長良の英語の勉強法に自信をもってのからこそ最後までついていこうという気になれました。
 - ・長良高校の3年間のプログラムには、初め不安があったけど、速読、多読などを継続した結果、長文が難なく読めるようになりました。
 - ・大学でも英語頑張ります。

4.4 「長良メソッド」の課題

「長良メソッド」という新しい取り組みを始めてから6年が過ぎた。授業改善の大枠も固まってきている。同時に、1年生から3年生までの3年間を見通した実践の中で、さまざまな課題も見えてきた。

- (1) 現行の指導法の効率的な流れをさらに強化するにはどうすればよいか。

現行の指導法の大きな流れは、1年生ではリスニング力やスピーキング力を高め、前から順番に英文を理解していく力を育成し、2年生では1年生で培った力を、音声から活字、すなわちリーディング力（読解力）やライティング力へと向上させ、3年生では、その4技能の基礎力をもとに、大学入試に対応できる能力の育成に重点を置いている。この流れをどうすればもっと効率的になるのかを、3年間全体を見据えながら、洗練していく必要がある。

- (2) 語彙力をどうつけるか。

現行の教授法では語彙力の補強が一番弱い点である。計画の段階では、教科書の単語を5段階のレベルに分け、コンピュータを用いた「ボキャブラリーテスト」なるものを実施し、教科書に出てきた基本的な単語の定着を図る予定であった。しかし、コンピュータのプログラムを開発する時間的な余裕がなく、現段階では実行できずにいる。

- (3) 大学受験との兼ね合いをどうつけるか。

新しい教授法だからといって、大学受験を無視するわけにはいかない。もちろん、この教授法が大学受験とかけ離れたものだというわけではなく、大学受験のための英語があるというわけでもなく、すべての基本は共通するものである。どの時期に、どのように大学受験を生徒に意識させるのかを考える必要がある。

- (4) 生徒のモチベーションをどのように維持させるか。

現在の教授法は、生徒の自主的な活動（音読、書き写しの家庭学習など）が多く、その目的や意義を理解させ、モチベーションを維持させるさまざまな方策を考え実行していく必要がある。

る。

- (5) どのように文法を教えればよいか。

現在は文法に特化した授業は行わず、教科書に出てきた文法事項をその都度教えることにしている。ただ、限られた時間でできるだけ効率よく文法を教える方法はどのようなものがあるのか。学習指導要領の「文構造」という考え方も含めて、コミュニケーションのための文法の教授法を確立する必要がある。

謝 辞

本研究を発表する機会を与えてくださった（財）日本英語検定協会と選考委員の先生方に心より感謝いたします。この英検助成金をご縁で、池田央先生にご指導いただくこともできました。また、教育長の松川禮子先生、岐阜大学の伊東英先生、益子典文先生、岐阜聖徳学園大学の大石晴美先生、長良高校の平野恒彦元校長先生、佐久間朋子前校長先生、柴田益孝現校長先生、岐阜県教育委員会の小椋博文先生、伊藤信子先生、長良高校の英語科の先生方、生徒や卒業生たちに厚く感謝を申し上げたい。

平成15年秋、岐阜県教育委員会から SELHi (Super English Language High School) に応募してみてもどうかとお話をいただき、お受けするかどうかを英語科会議の中で話し合っていたとき、平野恒彦先生（当時校長）が語った言葉がある。その言葉を本稿の結びとしたい。

英語教育は大きな転機に直面しています。皆さんはこれから長年英語教員を続けていかれます。近い将来必ず、皆さんを大きな曲がり角が待ちかまえていると思います。そのとき、どうするか、ではなく、今から自分のやり方を模索することが必要ではないでしょうか。そういう趣旨で立案し、それで、強い指導が入るようなら抵抗しましょう。折り合いがつかないようなら降りましょう。いずれにしても、実際に運営しているのは英語科の先生方全員ですから、先生方の思いが生きるやり方でなければうまくいきません。

参考文献 (*は引用文献)

- Doughty, C. & Long, M.H. (2005). *The handbook of Second Language Acquisition*. Blackwell Publishing Ltd.
- Doughty, C., & Williams, J. (Eds.). (1998). *Focus on form in classroom second language acquisition*. Cambridge, U.K.: Cambridge University Press.
- Ellis, R. (1997). *Second language Acquisition*. Oxford Introductions to Language Study. Oxford University Press.
- Gass, S.M. & Selinker, L. (2001). *Second Language Acquisition An Introductory Course 2nd ed.* Laurence Erlbaum Associates.
- * 岐阜県立長良高等学校. (2003). 「平成16年度スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクール研究開発実施希望調査」.
- 羽藤由美. (2006). 「英語を学ぶ人・教える人のために—『話せる』のメカニズム」. 京都：世界思想社.
- 石神政幸. (2005). 「音声を通じて学ぶ基礎・基本の定着—我が校での授業改善」. *UNICORN JOURNAL*, No.62. 京都：文英堂.
- 石神政幸・伊東英. (2008). 「英語『ライティング』の授業改善—岐阜県立長良高等学校の実践から—」. 岐阜大学カリキュラム開発研究. Vol.25.
- 門田修平. (2007). 「シャドーイングと音読の科学」. 東京：コスモビア株式会社.
- 金谷憲編. (2001). 「高校英語教育構造改革論 プロジェクトIF」. 東京：開隆堂.
- 小寺茂明・吉田晴世編. (2005). 「英語教育の基礎知識：教科教育法の理論と実践」. 東京：大修館書店.
- 小池生夫編集主幹. (2004). 「第二言語習得研究の現在—これからの外国語教育への視点」. 東京：大修館書店.
- 河野守夫他. (2007). 「ことばと認知のしくみ」. 東京：三省堂.
- 國弘正雄・千田潤一. (2001). 「英会話・ゼッタイ・音読【入門編】—英語の基礎回路を作る本」. 東京：講談社インターナショナル.
- * 文部科学省. (2009). 「高等学校学習指導要領」.
- * 文部科学省. (2009). 「高等学校学習指導要領解説 外国語編 英語編」. http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/1282000.htm
- 村野井仁. (2006). 「第二言語習得研究から見た効果的な英語学習・指導法」. 東京：大修館書店.
- 中西哲彦. (2009). 「キーワードは、『音声・発信・活動』そして『全員で取り組む』岐阜県立長良高等学校の巻」. 『STEP 英語情報』1・2月号. 日本英語検定協会.
- 岡田伸夫. (2001). 「英語教育と英文法の接点」. 京都：美誠社.
- 大石晴美. (2006). 「脳科学からの第二言語習得論—英語学習と教授法開発」. 京都：昭和堂.
- 斎藤栄二. (2003). 「基礎学力をつける英語の授業」. 東京：三省堂.
- 白井恭弘. (2008). 「外国語学習の科学—第二言語習得論とは何か」. 東京：岩波書店.
- 高島英幸編. (2000). 「実践的コミュニケーション能力のための英語のタスク活動と文法指導」. 東京：大修館書店.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一. (2006). 「英語感覚が身につく実践的指導—コアとチャンクの活用法」. 東京：大修館書店.
- 土屋澄男. (2004). 「英語コミュニケーションの基礎を作る音読指導」. 東京：研究社.
- 【教科書・テキスト】
- * 原口庄輔他. (2008). *PRO-VISION ENGLISH COURSE I New Edition*. 東京：桐原書店. 平成18年3月9日 文部科学省検定済教科書 高等学校外国語科用.
- * 石黒昭博. (2005). *オールラウンド英語総合演習 Aレベル* 第9刷. 京都：美誠社.
- 【その他】
- * ACE
英語運用能力評価協会 (<http://www.english-assessment.org/products/test/ace.html>).
- * CASEC
教育測定研究所 (<http://casec.evidus.com/>).
- * GTEC
ベネッセコーポレーション (<http://www.benesse.co.jp/gtec/>).

Lesson Plan-Shipwrecked

1. Students listen to the Tom Sawyer Tapes (10 mins)

2. Students read the story about Robinson Crusoe and then answer questions (8mins)

- How did he get food? He grew corn and raised goats
- Who came to the Island? Cannibals
- What name does Robinson Crusoe give to the man? Friday
- Why does he name him that? He met him on a Friday.
- What does he teach Friday to do? To read, write and speak in English.
- How long did he live on the Island? 28 years

3. Students are told a short story (3 mins)

You are traveling to America for the first time on a ship!! Suddenly a storm comes. There is lightning and it rains hard. Then the ship sinks. You swim to a desert island. You are alone on the desert island. There are no animals, only coconuts. All around you is salty, sea water.

4. Free Talk (3mins)

If you could choose any person who would be there with you? Your family, your friends or your teachers, why? Play Janken winner starts first. Then it is the losers turn.

5. Choosing an item (5mins)

Students look at a list of twelve items. Then students choose the three items they think are most useful.

6. Individual Brainstorming (5mins)

Why is your item useful? Think of many uses for it.

7. Conversation One (5min)

Students make pairs and play Janken. The winner starts and records the conversation.

8. Conversation Two (5min)

The loser starts and records the conversation.

9. Dictation (5mins)

Robinson Crusoe by Daniel Defoe

One day a young English man called Robinson Crusoe went on an adventure. He wanted to go around the world by ship. After a big storm his ship was *shipwrecked. He was all alone on an island. He started to grow corn and raise *goats. Now he had enough food but he was very lonely. A few years later some *cannibals come to the island with a man. They wanted to eat him! Robinson Crusoe saved this man and named him Friday, because he met him on Friday. He taught Friday to read, write and speak in English. After Robinson Crusoe lived on the island for 28 years, a ship came to the island and Robinson Crusoe and Friday went back to England. His family thought that he was dead and were very happy to see him again.

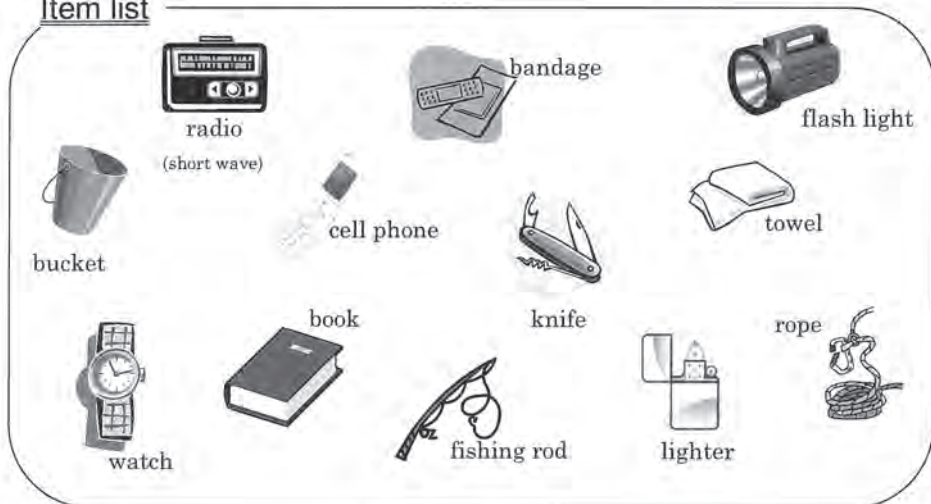
Note: shipwreck 難破する goat ヤギ cannibal 人食い人種

Island Survival

Listen to the story!



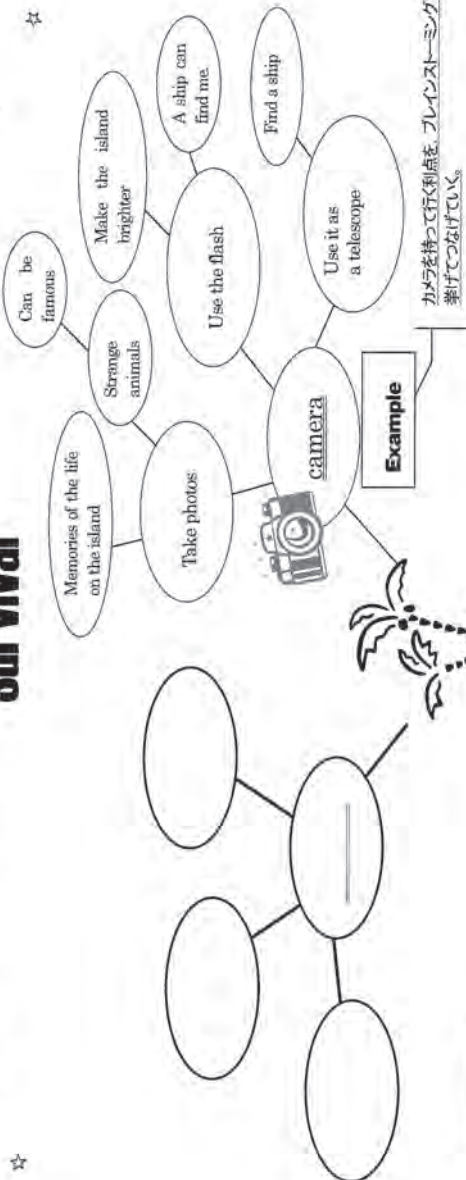
Item list



Helpful Hints

- ☐ I think the _____ is the most useful item, because...
- ☐ That's true, but...
- ☐ If I had a camera, I could take photos.

Island Survival



Example

カメラを持って行く利点を、ブレインストーミングでたくさん挙げてつなげていく。

